新たに始まるfateの物語

よなみん/こなみん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冬木の聖杯戦争は終わった・・・

命を刈り取る戦いは終わり、その地にあった聖杯は破壊され、その事実は隠蔽された。

いつしか時が流れ、人々は聖杯と呼ばれるものの存在すらも忘れていた。

そして冬木の聖杯戦争から数年後。舞台は大阪、府全体を巻き込んだ新たな戦争が今、幕を開ける。

目次

1話 …… 1
2話 …… 15
3話 …… 26
4話 …… 38
5話 …… 48
6話 …… 58

1話

第5次聖杯戦争から数年。
冬木に置ける聖杯戦争に終止符が打たれた。大聖杯の解体により、魔術協会も実質的に解体、冬木に施されていた魔術自体も解体されていった。
しかし、聖杯の存在を知った人々は、その欲望を止めはしなかった。

――大阪――

「がぁぁぁっ・・・疲れた・・・」
授業終わりのチャイムがなる。少年の名前は間桐（まとう）慧（けい）、今読んでいた本は姉から譲り受けた少し古い本だった。
場所は図書館。静かな空気が、少年は気に入っていた。その場に座っていた椅子から立ち、少し背伸びをする。夕日がカーテンの隙間から入ってくる。
机に広がった教科書類と筆箱、それと本類を一気にまとめて、カバンの中へしまう。
ついでにメールを確認する。そこには姉さんからのメッセージが届いていた。

『仕送りしておいたからね☆』

ありがとう。とだけ送り返して、俺は図書館を後にしようとすると、少し背の大きい、女性の魅力がそのまま具現化したような女性と鉢合わせになる。

「あらあら、今日はもういいんですか?」

彼女の名は正式には聞いていないから分からない。だが、彼女はキアラ、そう言って欲しいと言っていた。

この図書館の司書で、一応・・・教師・・・らしい。

俺は彼女の授業を受けたことは無い。だからどう言った授業をしてるかはわからないが、この図書館に来る度に、俺に突っかかってくる人だ。

「ええ。いい勉強になりました」

「もうっ。私に言ってくだされば教えしたのに・・・」

「あなたは仕事で忙しんだ。なら自分でヒントを探しながらやるのがいいんでしょう。その方がモチベーションがありますしね。最近の若者たちが勉強しないのは解く楽しさを知らないからですよ」

「あなたらしいですね。ふふっ」

わざとらしく微笑む彼女だが、それさえも色っぽく見えてしまう。彼女の魅力か・・・あるいは何か意図的なものなのか。

渋い顔をしてる俺に、彼女は1冊の本を差し出してくる。そう彼女は俺に会うとこうして定期的に彼女のオススメの本を差し出してくるのだ。
「これは?」
「今回のは恋愛モノですわ。許されない恋・・・それを叶えるために奮闘する少年少女・・・」
「ははっ。あなたらしいや」
「あら?私に恋でもしてますか?」
「違いますよ。あなたに最初にあった時も確か俺に恋愛モノを押し付けて来たから懐かしいと思ったからです」
彼女と初めて会った時、彼女は「運命の人」なんて冗談も言ってきたが、なかなか悪い人ではないことも会った時に理解した。
その時は本の話で一日を費やした思い出がある。そして最後には彼女のオススメの本を渡された。それからこんな感じにずっと渡してくるのだ。
しかも俺が来る時間は大体把握しているらしく、俺がいる時は大体彼女もいるのだ。
「それでは。また明日」
「ええ。また明日」
彼女と別れ、図書館を出る。広く見通しのいい廊下へ出る。窓の外からは赤い夕日が

眩しい。

学校の外へ出て、自身のバイクまで足を運ぶ。制服を脱ぎ、いつもの服装へと着替える。バイクに跨り、ゆっくりとエンジンを入れる。

風を切るように道路を疾走する。いつもの見慣れた光景が目に入る。風を切る快感はやはりいつ乗っても気持ちがいいものだ。

――アパート――

「ただいま」

「遅いっ！」

家に帰ってそうそう、部屋の中から怒号が聞こえる。おかしい、俺の部屋には俺以外入れないはずだ。

鍵も俺以外持っているなんてことは基本的にはありえないわけで、もし、鍵なしで入ろうなら高度なピッキング技術がいるんだろうが・・・俺の中では即効で答えが出てしまった。

恐る恐る部屋の奥へと進んでいく。そこにはお母さんのような服の上にエプロンを着るスタイルの女性がいた。

長い髪に青眼の美人だ。聞いたところによると外人らしい。このアパートの管理人だ。名前はマルタさん。

「もう!こんなに散らかして掃除もしないで!」

「マルさん・・・」

「マルタさんです!」

面倒みが良いのか、彼女は暇な時には自分の部屋に来て掃除をしたり、料理を作ったりと俺のお母さん的な存在の人だ。

初めは心から優しい人だと思ったが最近になってこの人が怖いと思ってしまう。何故か俺の部屋に来ることが怖いのだ。俺が特になにか言っているわけではないのに。しかし、そこは彼女の気遣いだろうか。

「全く!部屋の掃除は心の掃除です!ここを綺麗にするだけでもだいぶ変わるんですよ!?」

「・・・たかが本が散らかってるだけでしょう?」

「されど本です!最低限のスペースは確保しているようですがそれではダメです!何かあってからでは遅いからです!」

「はぁい」

この人は常に・・・いや、極度の心配性だ。

しかし、この人は外見は良いし、普通に家事も出来るから人気者でしかもモテるのに・・・どうして俺の部屋に来るのか。1度これについて理由を聞いたことがあるが、彼女は「気にしないでください。私がやりたいだけですから」といって気にも止めなかった。

だが、男が1人で住んでるところに女性が入ってくるのもあれだ、すごい困る。

「とりあえず明日は早いので今日は寝ますよ」

「勉強は？」

「今日はとっくに済ませました。なので明日頑張ります」

「なるほどね。それなら分かったわ。でも！しっかりご飯を食べてから寝てね！あとお風呂も入ること！」

「はーい」

このやり取りを最後に彼女は俺の部屋を出ていく。キッチンには作り置きしてある料理と、使用されてさらに綺麗になっている包丁などの用品。布団はしっかり整頓されていて、服もきっちりハンガーにかけられている。

ここまで見ると彼女がどれだけ家事ができて面倒みが良いか嫌でも理解してしまう。全く。困った人だ。

「いただきます」

とりあえず彼女に言われたからにはやらなきゃ行けない。明日文句言われるのも嫌だしね。

その日はゆっくりご飯を食べ、お風呂に入ってからしっかり寝ることにした。

――次の日――

ゆっくりと目を開ける。気づけばカーテンの隙間から日差しが入ってきていた。ゆっくり身体を起こして、窓を開けると夏に相応しい冷たい風が頬を撫で、身体全体に染み渡る。

目を擦り、時間を見る。朝の７：００、ふむ。十分な時間じゃないか。

昨日の作り置きの余りを食べる。やはり美味い。味は多少落ちてても美味い物は美味いのだ。

と、部屋のチャイムが鳴り響く。俺は誰が犯人か分かってるので敢えて無視しようとするがチャイム音はどんどん間隔を短くしていく。

「せんぱーい！いるんでしょ!?」

「鈴か・・・うるさいよ。近所迷惑」

「はいすいませー・・・って！先輩が出ないのが悪いんでしょ！」

「今どきのギャルに付き合う気はない」
「即答?!酷っ?!」
御上（ごぜん）　鈴鹿（すずか）、若草色の髪に少し崩したような制服の着方をする現役ＪＫで、俺たちの後輩である。ちなみに鬱陶しい。
「せっかく先輩の家に寄ったのに・・・」
「残念。俺はバイク通いだから」
「後ろに乗せて☆」
「・・・まぁちょっとだけならな」
そう言って彼女を部屋に上げ、無理やり着替えさせる。その・・・バイクに乗る時にさすがに制服だと色々困るからな。さすがに最低限の防護はして欲しいものだ。
俺のバイク用をもう一着着せて、ヘルメットを被せる。
俺の後ろに乗り、腰に彼女手が回ってくる。背中には年相応の身体が押し付けられる。
「行くよ」
「はーい！」
元気な声を聞いたのでとりあえず満足。俺はバイクを走らせる。目指すはいつもの学校だ。

――学校――

「よう！お姫様っ！」
「その名前はやめてくれないか？」

教室に入るなり、いきなり肩を叩かれる。叩いた人物は天月御門（あまつきみかど）。俺の友人であり、この学校で悪事を働く悪友でもあった。しかし、悪を働いても友達でいられる理由はコイツの気さくなところが気にいったからだ。

ちなみに俺がお姫様と言われている所以だが姿だろうな。俺の髪は普通の男子よりは遥かに長く、長くて腰あたりまである。そして身体が男みたく筋肉質でないことも理由に挙げられるのだろう。そして去年の学園祭、俺が女装をしたことがきっかけでお姫様、鬼姫とも呼ばれるようになった。

「今日はなんの授業を取るんだ？」
「さすがに歴史取ろうかな、そろそろ出ないとやばいからね」

長い廊下を移動しながら、そんな事を会話する。授業単位が足りてなければ進級も出来ない。学校の辛いシステムが俺たちを襲う。

いくら嫌いな授業でも取らなければいけないのが辛いのだ。特に文学系はやりたくない。

その時学園内に放送が流れる。内容は俺を呼び出すものだった。空き教室までと言われたが・・・誰だろう。

「行ってこいよ。まだ時間はあるぜ?」

「そうだな。行ってくるよ」

2階、空き教室には涼しい風が流れ込んでくる。真ん中には青服に身を包んだ人が座って待っていた。身長は自分より少し低いぐらいの・・・教師。間違いない。ライネス先生だ。歴史全般の先生で俺の事を弟子と呼んでくる人だ。ちなみに身長は少し低いものの、教師だ。ちゃんとした教師なんだ。

「おお!弟子よ!来てくれたか!?」

「はいはい。来ましたよ」

「何故嫌そうな顔をする!こちらへ来い来い!なでなでしてやるぞ?」

「・・・遠慮します。子供じゃないので」

この人は色んな意味で絡みにくい。やれ色々あって弟子と呼ばれるようになったがそれすらも人前では結構辛い。教師の威厳はあるのか・・・と問いたい程だ。

しかしたまに見せる真面目な表情や仕事をこなしているのを見ていると憧れるもの

もある。
「ところで弟子よ、今日は何の授業を取るんだ?」
「今日は歴史ですよ、さすがに点数が足りないのでそろそろ出ないとマズいと思いましてね」
「そうか・・・今日は私じゃないんだよ・・・」
「え?」
「今日はキアラなんだよ。全くあの女に任せたくないんだよ・・・むー」
なるほどな。俺に会いたいだけにこの人は職権乱用をしたわけだ。なんて人だ。
しかしキアラさんが今日やるのか。あの人は定期的にくるが彼女の授業には全くと言っていいほど行ったことは無い今日は何の授業だろうか。
しれっと俺の膝に頭を寄せてくるライネス先生。ぺちっと手で払うがゾンビのように再び起き上がっては寄ってくる。こういう所がなければ素直に憧れるんだけどなぁ。
「ん?もうこんな時間か」
「む?もう時間か?」
「ええ。名残惜しいですがここで失礼します。先生」
「仕方ないな、また会おう弟子よ!」
「はいはい。お元気で」

予鈴のチャイムが鳴り響き、俺はライネス先生の元を後にする。別れ際になでなでされたが気にはしない。授業が行われる教室まで移動する。

歴史の授業。今日の担当はキアラさんだから内容は地味ーに分からない。まぁ聞いてれば終わる授業だから時間まで真面目にやるか。

授業を受ける教室には今日は俺を含め2人だった。例の御門だ。先に席に座ってこちらに手を振っていた。俺はバイク彼の隣の席に着席する。

「今日は2人だな」

「まぁいつもの光景だろ?俺らは人がいないところを責めてくからな」

「サイコーだな!」

「はいはい。授業を始めますよ?」

俺たちが談笑で盛り上がってる時、キアラさんがちょうどよく教室に入ってくる。教壇へ上がるとこちらに笑顔を向ける。さて・・・歴史の授業の始まりだ。

「今日は2人なのでちょっと難しい話・・・そうですね。古代の遺物について勉強しましょう」

――数分後――

「・・・以上が、この日本の遺物、三種の神器ですわ」
「うへぇ・・・なげぇ・・・」
授業の半分が過ぎ、俺たちは既に充分すぎる情報量を得ていた。しかし彼女は趣味のことを話し始めると止まらない。俺たちの情報整理が終わる前に彼女は次の話をしだす。
俺は次々と流れてくる情報をノートに書き込んでいくが、隣に座っている御門は既にダウンしていた、疲れからか、机に屈している。
まぁ無理もない、この授業は本来なら流してもいい内容だ。しかし単位を取るためにどの道出なければならない。が、隣の御門は最初こそ盛り上がっていたものの、今はこのザマだ。
キアラさんもキアラさんで大概だ。少しぐらいこちらに配慮して話しやすい話題をしてくれてもいいのに。それすらも無視してしまう。まぁ、彼女らしいから放っておくが。
「最後に聖杯の話ですわ」
「ん？聖杯・・・？」
聞きなれない言葉が入ってくる。てか、最後って言ったから隣の御門も息を吹き返したように起き上がってくる。そのまま倒れてくれればいいのに。

聖杯・・・架空の遺物であり、実際に実在したかどうか分からないものだ。俺が聞いた話ではあらゆる傷を癒し、美味な食事をもたらしたりする神の持ち物。だが。
「聖杯は架空の遺物でしょ?わざわざ授業するほどじゃないと思うが」
「いえ・・・聖杯は実在したのです。数年前に数回ほど」
俺たちは驚きを隠せなかった。あれほど架空の遺物と言われていた程の伝説が存在しただって?俺は隣の御門に視線を向けるが何故か彼は真面目な表情でキアラの次の言葉を待っていた。
「数年前に起こった事件を・・・貴方たちは知っていますか?」
「それは・・・」
「・・・」
「聖杯戦争ですわ。それは名の通り聖杯を求める戦い。最後の1人である王を決める争いです。そしてその勝者の願いを叶える聖遺物・・・それが聖杯ですわ」
俺たちはこの時、この話が本当に存在するなんて考えてもいなかった。

2話

――授業後――

お昼の時間になって俺たちは食堂まで来ていた。

「せんぱーい！あーんって！」

「近づけるな鬱陶しい。御門！どうにかしてくれ！」

「可愛い後輩がいていいな」

近くに座ってるのは御門、そして後輩の鈴鹿だ。鈴鹿が隣で、御門が対面だ。それぞれ違う料理を食べている。先程から鈴鹿がおかずを押し付けてくる。御門は呆れながらも箸を進めていた。

嫌々、彼女が差し出してくるおかずを口に含むと彼女は「これで私は先輩の旦那さんですね！」とか言ってくるが俺は涼しい顔でご飯を食べ進める。

「・・・で？御門は午後の授業はとるのか？」

「いや？このまま帰るつもりだ」

「そうか・・・」

「お前は？」

「俺は再び歴史かな？次はライネス先生の」
「ご愁傷さま。頑張れよ？」
「せんぱーい、勉強教えてください～」とすり着いてくる鈴鹿を引き剥がしながら俺たちは食器を返し、食堂を後にする。御門はそのまま荷物をまとめて帰っていった。
鈴鹿は俺より下の学年のクラスへと戻る。彼女は最後にウインクをして去っていくが、俺は気にすることなく、自分のクラスへと戻っていく。
「じゃあな」
「おう」

――御門ｓｉｄｅ――

「ただいま」
家に帰って一声。しかし返事はない。
それもそのはず。もうこの家には誰もいないのだ。御門は荷物を玄関先で放ると直ぐに奥の部屋へと向かう。
奥の部屋には祭壇・・・それと召喚陣みたいなのが部屋一体に敷かれていた。
黒魔術のような陣に真ん中に置かれた生け贄のようなモノ。それと所々光っている

蝋燭が不気味を醸し出していた。

「・・・よし。そろそろか・・・今日は予想外だったな」

夕方。日が落ちきる頃。それは彼の目の前の陣が意味を成すその時であった。

右手を前に出し、小声で魔術詠唱を開始する。始まりと同時に周りには霧が発生し、魔術陣が光を伴う。

「素(そ)に銀と鉄。礎(そ)に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方(しほう)の門は閉じ、王冠よりい出で、王国に至る三叉路(さんさろ)は循環せよ。

閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻(時)を破却する。

――告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理(ことわり)に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総(とこよすべ)ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！

――御門　自室――

「・・・やったか」
魔術詠唱のあと。彼の目の前には黒い霊衣を身にまとった黒髪の女性が紅き槍を背にして跪いていた。赤い瞳から出される視線に少し後ずさってしまう。
彼女のことは知っている。現代文書では「アルスター物語群」の「エメルの求婚」で読んだことがあり、さらには独自でも調べたことがある。ルーン魔術の継承者にして「神殺し」の異名、さらには影の国の女王など、いくつもの名を持った女性。かつての英雄、クー・フーリンの師匠でもあるこの女性。クラスはランサー、名はスカサハだ。
「・・・サーヴァント・ランサー。召喚に応じて参上した」
「来たか・・・」
「なんだ小僧、貴様が召喚したのか」
「小僧で悪いっすね。どう見ても他にはいないでしょうが」
「なるほどな。いやすまなかった。それで？私が呼ばれたと言うことはそういうことな

のだろう？」
　この女性の言うことは間違ってはいない。俺がコイツを呼んだのはそういうことだからだ。しかし、召喚はできた。これで俺も聖杯戦争に参加することが出来る。
「そうだ。せいぜい俺を勝たせて見せろよ？ランサー」
「ふっ。私を倒せるものなど、この世界にいるのか？」
「ここまで強いお前だといないだろ。せいぜい頑張ってもバーサーカーぐらいだ」
　このランサーは正直アタリだ。下手な強いヤツを引くよりもアタリだ。スカサハは万能故に魔術も使える、さらには「神殺し」の異名があるからそれなりに戦えるだろう。
　それに彼女の持っている魔槍、「貫き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルグ・オルタナティブ）」は命を刈り取る物。クー・フーリンの持つそれより強力なものだ。使う価値は十分にある。
「それで？私を召喚して終わりと言う訳では無いだろう？」
「まずは教会だ。お清めをしないとな」
「・・・戦いでは無いのか」
「戦いも連れて行ってやるよ。その後でな」
　俺は少し大きめのコートを羽織り、その中にいくつかナイフを仕込ませる。俺の使う魔術は操作系、小規模な物質なら問題なく操作できるものだ。しょぼい。
　まぁ、現代に置いて魔術はそう簡単にぽーぽー使えるものでは無いからな。こればっ

かりは仕方ない。
「よし・・・夜になったら出るぞ」
「それまで何をするんだ?」
「・・・現代の暇つぶしを教えてやる」

――大阪　大阪市　市街地――

「ほう。ここら辺はまだ明るいな」
時間は丁度夜、俺たちは早速教会に向かうべく外を歩いていた。
ちなみに召喚の後、俺たちはチェスをしたりお茶を飲んだり、お菓子を食べたりとまさに現代チックな過ごし方をしていた。
駅周辺はまだ街灯が付いていて明るいところが多い。俺たちはなるべく光を避けてくらい所を歩いていた。
「さて・・・教会というのは?」
「すぐそこだ・・・ほら」
たどり着いたのは少し古い教会、レンガ造りなのが歴史を感じさせてくれる。重い扉を開けると、明るい光が差し込んでくる。奥には神父らしき人が立っていた。

彼のことはあまり知らないが言峰の姓を名乗っていた。つまりは魔術教会系列の人なのだろう。恐らくこの人が今回の戦争の管理人でもある。

「来ましたか」

「頼みますよ・・・」

スカサハ・・・ランサーの清めが始まる。その間。俺は教会の端で腕を組みながら椅子にもたれかかる。

召喚されるサーヴァントは7騎、伝承ならセイバー、そしてバーサーカーが当たり枠と言われているが、今回ばかりは負ける気がしない。

手持ちの小説で時間を潰す。内容は猟奇的な物だが、俺は個人的には好きだ。殺人鬼の悲しい心を考えるということが最近の楽しみだ。文章を読むことも。

これを勧めてくれたのは慧だった。アイツは「これの方が心情はわかるだろ」とか言いながら、俺にゆっくりと勧めてきた。

「終わったぞ」

気がつけば、スカサハが目の前にいた。服はライダーズスーツみたいな感じになっていて、召喚した時に背負っていた貫き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルグ・オルタナティブ）は消えていた。

「じゃあ行くか」

「わかった」

俺たちは教会を後にする。
外の街灯はほとんど消えていて、駅周辺ですら暗く見える。俺たちはとりあえず手当り次第街を歩いていく。
微かに魔力は感じる。しかし、誰かのなんて細かく気にしている暇はない。サーヴァントの魔力は通常の人間の魔力より遥かに大きいのだ。外に出歩いていれば大体わかる。
このスカサハもそうだ。コイツの隣にいるだけでそうとうの圧を感じる。
「どうしたのだ」
「なんでもねぇよ」
サーヴァントっていうのはこうも鈍感なのか。あるいは自分の力を自覚してないからなのか。キョトンとした顔でこちらを向いている。
「これだから女は・・・」

――月夜　学園周辺――

「ここら辺にも何も無いか」
「ハズレだな。次」

俺たちは魔力の赴くままに、街のあらゆる所を行き来していた。これで４箇所目、ハズレばかりだ。

スカサハも「どうする？」と言わんばかりの顔をしている。いや、この顔はただ、戦いたいだけだろ、こいつは。

そんなことはどうでもいい。ここを後にしようとするが、校門から出るところでスカサハに止められる。左手が俺の前に差し出される。

スカサハの視線の先にはタバコが捨ててあった。この学校でタバコを吸うやつは教師だろうといないはずだ。なのに何故・・・

その疑問は一瞬にして答えに変わる。そのタバコに火が着いた途端、あたりが大きく燃える。

俺はスカサハに抱えられ、何とか校舎の入口まで運ばれる。

「大丈夫か？」

「大丈夫だ。誰が！」

その直後、俺はスカサハに思いっきり蹴られる。無防備な俺の体は校舎の中に容赦なく叩き込まれる。

「何やって・・・!?」

意識が晴れて目の前がクリアになると、そこには黒衣の狩人が、赤髪の、ランサーに

比べたら少し露出の多いサーヴァントらしき人物と対峙していた。魔力量は常人のじゃないから恐らくサーヴァントだろう。

問題はそのクラスと英雄の名前だ・・・バーサーカーだけは避けたい。

「ランサー！そのまま押し返せ！俺たちの有利なところまで下がるぞ！」

「マスターがそういうのなら任せよう！」

鍔迫り合いを弾き、そのまま貫き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルグ・オルタナティブ）を横に振るって相手を弾きとばす。

「急ぐぞ！」

「逃がすなライダー！追うぞ！」

どこからか低い男の声が聞こえる。なるほど、相手はライダーだな。バーサーカー出なければなんでもいいや。しかしあの赤髪・・・そして西洋式の盾と剣、間違いではなければあの英霊は「ブーディカ」、本の内容が確かなら彼女もケルトの女王の名を持つ女性だ。そして、ローマ帝国に対して反乱を起こしたロンドンを破壊したこともあるとかないとか。

しかし、広いところにいればどの道、他のサーヴァントがやってくるかもしれない。ならば好都合だ。この学校は俺の方が詳しい、狭い場所に持ち込んだらこっちが有利だ。槍は広いところより狭い場所の方が有利だろ。

「三階まで行く。俺の教室を荒らすぞ」

「よいのか？」
「当たり前だ。戦いに犠牲は付き物だろ？」
後ろから追撃の音が聞こえる。向こうも激しいのを望んではいないようだが、どうせｌｏｎｌの時には派手になるんだ。
俺たちは初めに教室に入る。後から続いてブーディカ、そしてそのマスターらしき人物が後からゆっくり入ってくる。
マスターの男は口元にタバコがあった。なるほど、あの男が魔術師で間違いないようだ。
「ほう・・・ここを死に場所に選んだか？」
「いや？死ぬのはお前だろ・・・っ」
「死なせないよ？なんだって私がいるからねっ！」
盾を前に、地を蹴ってライダーは突撃してくる。ランサーは俺の前に出て槍で突くが盾を貫通することはなく、むしろ弾かれ、外側に吸い出される。
魔力で強化されたのか、まさに全てを護る堅牢な盾だ。
「どうすればいい・・・」
俺は頭の中で作を広げながら、目の前の敵を睨んでいた。

3話

――月夜　学園　校内――

（なんだよアイツら!・正気かよ!・）

俺たちの教室の中では、紅い槍をもった黒衣の狩人と、盾と剣を構えた赤髪の女性が対峙していた、その後ろには二人の男が見える。

片方はタバコを口に・・・もう片方は・・・!?

「御門!?」

その直後、俺の身体に冷たい空気が流れる。身体はすくみ上がり、瞼は大きく開いていた。

そんな俺とは反対に後ろからは凄い熱量を感じた、触れただけでも火傷しそうな、まるで炎が後ろにいるようだった。

「すいません。あなたは魔術師（マスター）・・・ですか?」

彼女は白く・・・だがその瞳は獲物を見るかのように鋭い目をしていた・・・。

その直後、俺は返答する暇もなく身体が吹き飛ばされる。教室内にいた4人も即座に反応してお互いに距離をとる。御門は俺の姿を見て大きく目を広げていた。

「なっ!?一般人!?」
「慧っ!?」
「あら、こんなことで壊れてしまうのですね?」
俺の口から赤い液体が出る。意識は朦朧としていて、身体は地に打ち付けられたように重たかった。白い着物の女性はさらに俺の目の前まで来るがその直後に黒衣の女性に吹き飛ばされる。空中で体勢を直して次はその人に攻撃しようとするが、次は赤髪の女性に盾で飛ばされる。
御門の声と、野太い男の人の声が聞こえる。御門たちは俺の方に来る気配は無く、場所を移動しながら指揮をしているようだった。
身体が痛い。どこか骨が折れたのか、もう自分では分からなかった。手を地面に貼り付け這いずるようにして地面を張っていく。今の俺がどれだけ情けなくてもいい。それでも俺の身体が生きたがっている・・・。
俺は小声で詠唱を始める。かつて、姉さんの姉さんの部屋にあった本に書いてあった魔術と呼ばれるものだ。

〜〜〜〜〜

素に銀と鉄。　礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。
四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。
閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。閉(みたせ)じよ。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する。
――――告げる。
汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。
誓いを此処に。
我は常世総すべての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷しく者。
汝　三大の言霊を纏う七天、
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――――！

～～～～～

――???ｓｉｄｅ――

目の前には死にかけのマスター。そして広がるのは戦場。私はとにかくマスターの救出へと向かっていた。

「マスター!?大丈夫ですか!マスター!」

これを2回、3回やる。マスターの意識の回復予兆はなし、しかし脈はあり、マスターの生命機能はほぼ正常、しかし異常はあり。

背中部分に近い壁に打撃跡あり、マスターはここにぶつけられた可能性・・・と、考えてる場合じゃないですね。

私はマスターの耳元に「ちょっと離れますね」と小声をかけるとそのまま建物を駆ける。

強力な魔力を三つ検知、この上層階で戦闘している模様、その中には人間、マスターと思われる魔力も検知、ひとつはランサー、もうひとつはライダー、最後はバーサーカー。

段差の多い場所を登り終え、主戦場となっている場所へと到着する。私は刀を腰から抜き、目にも見えない速度で間へと割入る。

ライダー、ランサーの武器を刀で弾き、バーサーカーの扇を足であしらっていく。

大きくバーサーカーの身体がのけぞるが空中で、しっかりと体勢を立て直しゆっくり

と着地する。
「何っ!?」
「あら・・・また毒蛾が・・・」
「誰が毒蛾ですか！私は・・・っ!?」
「邪魔をしに来たのか知らんが丁度いいな。マスター潰せばよいのか？」
「まぁまずはバーサーカーの処理だ。頼むぞ」
「ライダーは正面から受け止めてくれ」
「了解したよ、マスター」
　ライダーとランサーはバーサーカーから処理するようですね。ならわたしもそれに乗って差し上げましょうか。
　ライダーが正面を突破する。バーサーカーから火球が飛んでくるがライダーの盾で防ぐ、ランサーが横から詰めるのが見える。なら私は逆からでも適当に詰めましょうか。
　ランサーの槍を素手で、私の刀を扇で受け流すとそのまま私たちの足元に炎を発生させる。私たちは受け身を取って被害を減らす。
「ライダー!・」
「ランサー!・」

「旦那様がお呼びなので・・・これで失礼しますね?」
「待てっ!ランサー!逃がすなよ!」
「っ!?炎か!」
ランサーが追撃しようとするが置き手紙するように炎をバーサーカーは置いていく。ランサーの追撃はそこでとまってしまう。
そう言えばマスターはだうなつたのでしょう。私は急いで戻ろうとするが、目の前にはライダーとそのマスターが立ちはだかる。
「どこに行く気だい?」
「悪いけど・・・マスターと離れてる今がチャンスかな?」
「・・・やりますか?私は構いませんが」
「やめろオッサン。時間だ」
後ろにいる少年はそう言うと外を見る。ふむ、どうやら日差しが差してきてるみたいですね。これは早く退散しましょうか。
「・・・潮時だな」
「行こう?マスター」
ライダーとそのマスターが、先に窓を突き破って逃げていく。追おうとしたが、ランサーがこちらに槍を向けていたのを見て、私は即座に警戒態勢を取る。

「・・・どうする?マスター」
「こっちも引こう。こうなっては、対策を練るしかあるまいよ」
ランサーとそのマスターも退却する。私は一息つくと、マスターがまだ倒れているであろう場所まで急いで向かうのであった。

――――慧　ｓｉｄｅ――――

声が聞こえる。女性の声が。
「・・・マスター!・マスター!・大丈夫ですか!」
うるせぇって言いたいの声がぐらい耳に響いてくる。身体は未だに満足には動かないが生きてるのを示す程度には動く。
ピクピクしながら腕を動かす。伸ばすように出した手は声の主に握られる。
「・・・うるせぇ・・・」
「マスター!?ご無事でしたか!」
「君は・・・?」
時代で言う羽織りと腰に刀を背負った少女が目の前にいた。この水色と白の羽織りは、江戸時代に発足した新撰組のものだ。

彼女はもしかしたら・・・いや、もしかしなくても幕末の天才、沖田総司かもしれない。

「ぐっ・・・がっ!?」

「わわわ!?まだ動かないでください!」

立とうとするが身体の痛みが酷く、ふらついてしまうが、彼女が慌てながらも支えてくれる。

彼女の手は暖かった。もう死んでいる人間とか関係なく、それは生きている人間の手だった。

彼女は過去で死んだ・・・つまり今彼女は生きているのだ。

「・・・大丈夫・・・」

「ダメです!私が支えながらお供します!」

「家の場所言うから送ってくれ」

◇

「・・・それで?君はあの沖田総司で間違いないんだな?」

部屋に戻り、俺は彼女から一通りの説明を受けていた。彼女は英霊と言う存在である

こと、サーヴァントクラスはセイバー。剣を操る英霊。

・・・しかし、彼女を何故召喚できたのか、なぜ俺の口から詠唱がでたのか謎である。この疑問に答えてくれる人はここにはいなかった。

「はい！新撰組1番隊隊長！沖田総司です！」

「・・・そう」

とりあえず俺はまだ開けてないダンボールの山を漁る。凛、凛・・・あった、凛姉の荷物だ。

前にもちょっとだけ言っていたと思うが。俺には姉がいる。二人の。1人は姓は違うものの血は俺の姉さんと同じ人だ。大姉さんと呼べばいいだろうか。

そんな凛姉が送ってきた荷物は本類だ。

その中に・・・あった。姉さんの古い本、所謂魔術書だ。

「それは？」

「姉さんの荷物さ。俺が欲しいって言って無理やり詰め込んだものだ」

その他には姉さんの日記やメモが。そのとなりのダンボールには桜姉さんの荷物が入っていた。主に料理本だが。

姉さんの持っていた魔術書を読んでいくと、やはりそこには聖杯戦争に関しての記述があった。

令呪による強制命令。勝ち残った勝者の行方・・・。
聖杯戦争とは基本、七騎の英霊（サーヴァント）による代理戦争。聖杯と呼ばれる聖遺物を巡って争う戦争のようだ。
しかし、姉さんの手記には聖杯戦争は無くなったと書かれているが・・・。
「・・・もしかして誰かが蘇らせたのか」
その時、誰かの腹の音が鳴る。安心していたせいで、その音で余計にビビるが、音の張本人はビクともしない顔で「ご飯ありますか？」と俺に尋ねてきた。
英霊（サーヴァント）でもお腹は空くのか。そう思った矢先。俺の部屋の扉が勢いよく開く。そこには鬼の形相。このアパートの管理人、マルタさんが拳を鳴らしながら立っていた。
「・・・マルタさん」
「この時間まで・・・って！あなた！怪我してるの!?」
俺の服に残っている微かに赤い血。彼女はそれを見た瞬間慌てて近寄ってくる。
服は帰って着替えたし、傷はほっとけば治るものだと思っていたが・・・やはりこの人の観察眼はスゴすぎる。小さい痕跡すら見逃さないとは。
俺の言い分を無視してマルタさんは俺を椅子まで担いで行く上着だけを脱がし、テキパキと消毒してくれる。まるで慣れてる。
「・・・何があったの」

「あなたに言う必要が？」
「力になれるかも」
「ダメです。マルタさんは関わるべきじゃない」
「・・・もしかしてその娘関係？」
　マルタさんの鋭い視線の先には、沖田さんがお腹を空かしてゴロゴロしていた。
　しかし、マルタさんは一般人だ。聖杯戦争の記述には魔術師の記述があった。つまりこの戦争は魔術師たちによる自分の欲望を叶えるための戦争。関係ない一般人はどうなるか・・・。
（・・・最悪。存在を抹消されて事故として処理される）
　魔術教会と言う記述もある。故にこの戦争の管理者はもしかしたらそうするかもしれないという俺の考えだ。もし合っているのなら・・・この件にマルタさんを関わらせふ訳にはいかない。
「・・・言えないことなの？」
　心配している顔でマルタさんは俺の瞳を見てくる。こういう時のマルタさんは手伝ってくれる。俺が困った時も、悲しかった時も一緒に考えてくれた。しかし。
「これは俺の中で解決することです。マルタさんは関係ありませんよ」
「・・・そう。でも何かあったら呼ぶのよ」

今は・・・その言葉だけが俺の心を締め付けた。

4話

「おはようございます！マスター！」

マルタさんの寂しそうな顔が頭から離れなかった日の次の日。初めに見たのは俺の英霊（サーヴァント）。沖田総司の何故かワクワクした顔だ。

彼女の服装は昨日の新撰組の羽織とは変わり、桜色の和装となっていた。

が、そんなことはどうでもよく。俺は沖田総司に腕を引っ張られ無理矢理起こされる。

「なにさ」

「ご飯です！ご飯！朝ごはんを！」

フラフラとよろけながらも立つ俺にご飯を要求しながら沖田さんは抱きついてくる。正直鬱陶しい。

一回は蹴って引き剥がすものの、再び光の様な速さで抱きついてくる。厄介だ。

「分かったよ！うるさいな！マルタさんが来るだろ！」

時間を確認。朝の８：００だ。マルタさんは５：００起きの超近所迷惑には敏感の人だから少しうるさくしただけでも３０秒後には飛んできて鉄拳を喰らわせる人だ。そ

れがここまでうるさいんだ。来ないはずがない。
俺は急いで沖田総司の口を塞ごうとするが沖田総司も抵抗をしてくる。挙句の果てには俺が彼女を押し倒す形になってしまう。
「ごらぁっ！うるさいわよっ！」
が、時既に遅し、マルタさんが俺の部屋の扉を破って入ってくる。顔こそ見えないものの、俺には分かる。あの耳に響く怒号は間違いなくキレている。
オマケに８：００は日課のランニング後だろう。つまり彼女の格好は・・・。
「見つけたわよ。覚悟は出来てるんでしょうね」
・・・スポブラか。マルタさんも・・・ごふっ

「ご馳走様でした！」
「にしてもあなたよく食べるわね」
「昨日から何も食べてませんでしたので！」
マルタさんの鉄拳制裁後。俺たちは美味しいご飯を食べていた。沖田総司は昨日から何も食べていないと言うがほぼ嘘だ。昨日俺の冷蔵庫を開けて甘味を食べていたの

を俺は見逃していない。
　しかし、英霊（サーヴァント）でもご飯は必要なのか？基本的には魔力だけで十分だと書いてあったが・・・。
　いや。思い返せば姉さん達の日記には英霊（サーヴァント）が料理をしている文が書かれていた。
「ご馳走様です」
「ええ。後片付けですが・・・お皿は洗えますね？」
「何か用事が？」
「・・・この隣の隣人が最近生きてるか分からない所がありましてですね。部屋には鍵がかかってますし」
　隣の部屋・・・あぁ。刑姫ちゃんのことか。
「なら自分が行きましょうか？」
「ダメです」
「でもマルタさんが出ないなら一緒じゃ・・・」
「・・・なら仕方ありません。任せるわ」
　観念したのか。マルタさんは俺に刑姫のことを任せ、部屋を後にする。さて、お皿を洗いながらどうしようか考える。刑姫ちゃんは普通に外に出る性格の持ち主ではない。何かきっかけが欲しい・・・。

「マスター。この白い箱はなんなんです?」
「また君は・・・!」
しかし。沖田総司のその言葉で一つ思い出したことがある。そう言えばこの前マルタさんから貰ったケーキがまだ残っていたはず。
俺自身甘いものが苦手だが、刑姫ちゃんはこう言うのは好きだ。俺は沖田総司を退けて白い箱を取るとそのままの格好のまま部屋を出ようとする。
「・・・隣の部屋に行くよ」
「あっ!お供します!待ってください!マスター!」
英霊(サーヴァント)とは言え女の子だ。俺は彼女を呼ぶと彼女は嬉しそうに飛んでくる。部屋を出ると、鍵を閉め、隣の部屋へと手を伸ばす。
深呼吸をする。会いに行くのは久しぶりだ。もしかしたら忘れてるかもしれない。いや、彼女の事だ、多分忘れている。あまり長居せず、用事だけ済ませればいいだろう。騒がなければマルタさんは来ないし長居しなければ姫ちゃんだって困らないはずだ。
そっと扉をノックする。一回、二回、三回・・・。
「姫ちゃん。僕だよ、慧だ」
返事がないから挨拶をする。これで何も返ってこなかったら別の方法を考えなきゃ行けないな。

「・・・慧くん?」

と、中から可愛い女の子の声がする。弱々しい声だが間違いない。刑姫ちゃんだ。

彼女は同人サークルの書き手で、売り子ではない。しかし、書き手と言うだけあって彼女の書く作品は格別だ。俺も何度か買って読んでいるが興味が湧きすぎて彼女の書く作品を早く読みたいと思うほどだ。

そんなこともあって俺たちはネットグループ。姫ちゃん同好会を開放、俺は姫ちゃんのお気に入りということもあって何故か情報部員の印を押されている。

その後、ゆっくりと部屋が空く。そこには夏が近いともあって薄着・・・と言うよりは下着のペンネーム、姫ちゃんこと、八坂(やさか)　刑姫(けいき)が今にも倒れそうな顔をして出てくる。

「慧くんだぁ・・・」

出てくるや否や俺が反応するより早く彼女は俺の胸に飛び込んでくる。女の子特有の匂いが鼻に触ってくる。

が、そんなことはどうでも良く、この格好では誤解されかねない。沖田総司もどうしたらいいか分からなくてソワソワしている。

「と、とりあえず部屋に入ろう!ほ、ほら!ケーキもあるしさ!」

「ならこっちが私の部屋だよ?」

「姫ちゃんの部屋に用はないの!リビングがいいな!」

相変わらずマイペースな姫ちゃんに俺はオロオロしっぱなしだ。まぁ女性にぺたぺた触られるのは慣れてないし、そもそも姫ちゃんは普通にスタイルがいい。部屋でだらんとしてる割には太ってないし・・・おっぱいや・・・おしりが同世代の女の子よりかは全然成長している。

そんな女の子が玄関で半裸で出てくるんだ。オロオロしないわけが無い。

今、押し倒せとか思った奴はあとでシバいてやるからな。

「マスター、この方は?」

「あぁ。家族みたいな人でこのアパートでの数少ない知り合い、通称姫ちゃんだ。普段は本を書いたりイラストを書いたりしてる」

「へぇ・・・文書を」

何か勘違いが起きた気がするが、無視しておく、リビングまで来て、ケーキ入りの箱を机の上に置いておく。姫ちゃんは冷蔵庫からお茶を出してくれている。

隣の部屋は姫ちゃんの部屋、下着が脱ぎ捨ててあったり、ゲーム機があったり、テレビ画面にはイケメンたちが映し出されてたり・・・。

普段はぐーたらしてる姫ちゃんだが俺が来た時にはこうやっておもてなししてくれる。半裸なのは勘弁して欲しいがまぁ、出でくれないよりはマシだと思ってる。信頼してる・・・のかなあ。

「ゆっくりしていってね？」
「あっ。はい」
　だがココ最近姫ちゃんに会ってなかったのにはわけがある。それはなんと言うか、私情で忙しいって言うのもあったのだが、それ以上に数ヶ月前から姫ちゃんの様子が少しおかしいのだ。いつもは脱力した感じのまったりした女の子だったのに今では獲物を見る目をしながら何故か生き生きとしている気がする。
「・・・最近寝てます？」
「どうして？」
「布団がですねぇ・・・全然使われてるようには見えないのですが」
「・・・最近忙してね」
　理解した。要するに新しい同人誌の発想が出来たから彼女はそれに本気を出してしばらく寝てないのだ。そして彼女が今日半裸だったということは・・・。
「まだ出来てないんだ」
「うん・・・」
　ビンゴ。やっぱり出来てないんだね。
　さて・・・手伝うのもいいけど俺は素人だ。何か特別手伝えることがあるという訳でもない。さらに言ってしまえば素人が手伝ってプロの仕事を邪魔したくないというの

も考えだ。

・・・気まずい。姫ちゃんも座って三人は特に会話も弾ませることなくただ、ケーキを食べたり、お茶を飲んだりしている。沖田総司は俺と姫ちゃんの顔をキョロキョロと見ている。

「・・・彼女?」

姫ちゃんからの第一声がそれだった。不意をつかれた俺は「ひっ!?」と柄にもない声を上げてしまう。

別に沖田総司は彼女という訳では無い。どちらかと言えば昨日知り合った同居人というポジションだ。それも俺の生活パターンを大きく崩してくる迷惑な同居人だ。決して、断じて、彼女という存在では無い。

俺は「違うよ」と短く答えてケーキを頬張る。前では姫ちゃんが「よかった・・・」と安堵しているのが見えるがなんで?なぜそんなに安心しているのか俺にはわからなかった。

「それで?本あとどれぐらいで出来る?俺たちに手伝えることは?」

「それがね。あと数ページなんだけど・・・モデルが欲しくて・・・頼める?」

モデルかぁ。初めてあった時も確かそんなお願いされたんだよなぁ。男物のＢＬ本を書こうとして確か無理矢理被検体にされたんだよな。懐かしい。その時は御門も共

に犠牲になったものだ。
「いいけど？俺？」
「ううん？そっちの・・・彼女に」
そう言って姫ちゃんが指を指す先。そこにはもぐもぐと美味しそうにケーキを頬張る沖田総司がきょとんとした顔で「なんですか？」とハテナを頭にうかべていた。

「ありがとう。これで書けそう」
「うん。書けそうなら何よりだよ」
あれから沖田総司は犠牲となり、姫ちゃんにあんなことやこんなことをされていたようだ。
同じ女性どうし、やはり手加減は無いようで。だが帰ってきた沖田総司も何故かわくわくしていた。この二人に一体何があったんだ・・・。
ともかく、これでマルタさんに言われていたお使いが終わった。後はお昼からフリーだからどうしようか考えるだけだ。そうだな。買い物に行って日用品を新たに買い直すのもいいかもしれないし、ご飯のおかずを買いに行っても良い、またまた、部屋でゴ

ロゴロしながら課題をやるのもいいかもしれない・・・。

が、そんなことを考えていると沖田総司が、俺の服のすそをクイクイと引っ張ってくる。

「何？」

「良ければお昼から散策に行きませんか！ここら辺のことよく知りたいです！」

・・・英霊（サーヴァント）はマスターに忠実かと思ったがこんなにグイグイ来るものなのか、それともコイツが特別なだけなのかはそういった人間では無いからわからないが、彼女が行きたそうにしているのは確かだ。ここは乗ってあげるのが吉だろう。

「いいよ」そう短く答えて俺たちは部屋に帰ってくる。俺は沖田総司をリビングに置いて自室にある外出用に必要なものだけ取り出す。

「準備出来たよ。行こうか？」

「はい！沖田総司、不肖ながらお供致します！」

沖田総司が嬉しそうに後ろから着いてくる。俺たちはそのまま街へと向かう。マスターであることを・・・今は忘れよう。

5話

姫ちゃんの家訪問を終え、お昼頃、俺たちは大阪の市街まで出てきていた。時間はそろそろご飯を食べる時間なので今日は外食にしようと食べれる場所を探していた。

沖田さんはこういうのは初めてらしく、店を見る度見る度に俺に話しかけてきて大分鬱陶しい。だが、たまにはこういうのも悪くないと言う俺もいる。

「・・・沖田さん」

「はい！沖田さんです！」

「なんでもないや」

呼び方もいつの間にか「沖田総司」とフルネームから「沖田さん」に変わっている。というのも、彼女が「私の名前呼びにくくないです？そうだ！マスターがお好きにお呼びください！」と言われたから仕方なくそう呼んでいるだけ。少し子どもっぽいからこの呼び方は嫌いだが喜ばれているならまぁいいか。

少し歩いていると沖田さんが腕を引っ張ってくる。彼女の視線の先、そこには・・・俗に言うスィーツが並んでいるお店だった。和、洋問わず取り扱っているお店だ。

「目がキラキラしてやがる・・・」

「お!?せんぱーい！」

と、沖田さんが食品サンプルに目を取られている時、俺の後ろに重みがのしかかる。学校の後輩。御上（ごぜん）　鈴鹿（すずか）だ。生粋のギャルの彼女は今日は一人のようだ。

「来てたんだ」

「当たり前です☆ここはＪＫにもお気に入りのスポットなんですよ?」

「へぇ・・・」

生憎。俺は女子ではない。だから女の子の気持ちは分からないが・・・まぁ鈴鹿が言うなら間違いないんだろう。それに彼女の息抜きにも出来そうだしな。

「ならついてきてくれないか?」

「えー!?しょうがない！先輩が久しぶりにデレちゃったからね！」

「ありがと。沖田さん。行くよ」

「え！いいんですか！」

「置いてくよ」

沖田さんの手が俺の腕を掴んでくる。三人揃って鈴鹿オススメのお店へと入店する。そこは不思議と落ち着く場所でログハウスみたいな雰囲気を漂わせる店内を見せてくれた。

「いらっしゃい」と出てくる店員さん。この人は「メディア」さん。ここの店長の奥さん

で歳とは裏腹に幼女の見た目をしている何とも不思議な人である。一部の人からは魔女と呼ばれるぐらい美しい人なのだ。
「あら、鈴鹿ちゃんまた来たの？」
「そんそん！今日は先輩も一緒っちょ☆」
「久しぶりね、慧くん♪」
「お久しぶりです。お店には久しぶりに来ましたが・・・結構変わりましたね」
　ここに来たての頃、俺はここにお世話になっていた。居候させてもらい、メディアさんに料理を教わったり、夫の「イアソン」さんにＤＩＹを教えてもらったりした。そしてそこから数年。お店がここまで変わっていたのには驚いた。しかし、メディアさんの見た目は全くと言っていいほど変わっていない。不思議なもんだな。
　奥のキッチンではイアソンさんが優しく手を振っているのが見える。この二人は両方料理できるからこれから産まれてくるお子さんは困らなさそうだな。
「あら、私も？」
「メディアさんはいつも通り綺麗ですね」
「むぅ・・・」
「ふふっ。ありがとね」
　メディアさんの笑顔は普通の人とは違う何かを感じる。なんと言うか、惹かれるもの

があると言うか。まぁ、とにかく普通の人とは全然違う人だ。言葉では説明できない。

俺たちは角の席を取る。俺の対面に鈴鹿が、そして俺の隣には沖田さんが座る。

メニューは前のから大幅に変わっている。あの人たちは日本人じゃないから洋スィーツが多いが日本の甘味にも挑戦しているらしく。メニューも甘味が多くなっている。

「あんみつとパフェください」

「あたしはパンケーキ」

「はーい。ちょっと待っててね♪」

メディアさんがキッチンの方へと消えていく。ここは基本は二人、たまにバイトの人も見るがそれでも二人でやってることが多い。

イアソンさんもなんだかんだ優しい人だ。が、ちょっと性格が難しい人で背伸びをしているというか・・・頭が高いと言うが・・・。

「お待たせ♪」

「先輩先輩！パフェ凄くない!?」

「・・・わぁ」

パンケーキとパフェとあんみつが運ばれてくるがパンケーキは四段積んであってさらにパフェに至ってはなんだろう。装飾品が凄い。まるでパフェというよりは・・・芸

術品なのではないだろうかと思ってしまう程だ。程よく刺さったビターチョコ、そしてトロトロと流れるイチゴソース。そしてアイス、フルーツ、そしてクルミ、チョコクリームと何段も積み重なっていた。

　そして何より一番目を引いたのが・・・一番上に刺さった謎の剣だった。神話にでも出てきそうな聖剣の形をしていた。それも七本。

「どうかしら♪今日は張り切ってみたわ！」

「いや・・・これ・・・」

「嫌だったかしら？」

「・・・嫌じゃないです」

　しゅんとした顔は心に直接苦痛を与えに来るはっきり分かるんだね。正直こんな凄いものを作ってくるなんて思っても無かった。てか、俺頼んだのパフェだよね？なんでこれが？

「俺からのサービスだ！それに久しぶりに来たんだ！新作食ってけよ！」

　奥からイアソンさんの雄叫びが聞こえる。久しぶりに会う相手にこれをやるのは・・・そう考えたが、ここまでやってくれて言い訳はできない。覚悟を決めて食べることを決意する。

　ちなみに隣の沖田さんはあんみつに夢中で団子を食べて幸せそうな顔をしていたり、

鈴鹿はこのパフェを色んな角度から撮って写真を上げていたり・・・ほんとに、凄いです。

「ご馳走さまです」
「は～い♪よく食べたね♪」
「味はどうだった！」
数時間の死闘の末、俺たちは目の前のパフェを完食した。その前にパンケーキと言う試練があったが。鈴鹿はパンケーキを食しているうちにダウン。結局パンケーキの半分以上は俺が食して問題のパフェへ。三分の一食べたところでダウンしたが目を輝かせていた沖田さんが結局全て食してしまった。なので味と聞かれても・・・ほとんど語れないのである。
メディアさんとイアソンさんの目の輝きが痛い。感想を待ってるワクワク顔だけどごめん。食べすぎて語れそうにないんだ。鈴鹿も同様で彼女は机に倒れている。
「お、美味しかったですよ」
「良かった♪ね？あなた」

「そうだな!今度からこれを看板メニューにしようか!」
　止めて上げてください。というかやめて。そのまま行くとこのお店が大食い選手権の定番のお店みたいに周りが定着させちゃうから二人には悪いけどやめて欲しいです。でもこの笑顔には何も言えない。
「先輩・・・お会計・・・」
「俺がやるよ。鈴鹿。今日はありがとね」
　たまにはこういう所で先輩のいい所を見せないとな。俺は伝票を手に取り、レジまでゆっくり、歩いていった。

「・・・もう夕方か?」
「早いものですねぇ・・・あっ。夕日ですよマスター!」
　家のベランダ。布団を取り込んでいると雲ひとつない空の端に落ちていく夕日が見える。それを見る沖田さんもなかなかに様になっていて見とれてしまう。手にある団子されなければ完璧なのになぁ・・・。
　あれからちょっとずつ買い物をした。和服を買いに行ったり、和菓子を買いに行って

試食もしたり、沖田さん用の寝間着、普段着を買ったり、下着を買ったりした（鈴鹿同行の上）・・・Fぐらいあるって聞いたがFってなんだ。Fって。
「ところでマスター、夜はどうするんです?」
「・・・戦いに行くとでも?」
「聖杯戦争は始まってるんです。いつどこから敵が来るか・・・」
その時、家のベルが鳴る。マルタさんかと俺は思ったがあと人はベルは嫌いだ。近所迷惑と言いながら入り口を思いっきり叩きながら大声で叫んでくる人だ。そんな人が今更ベルなんか使うものか。
沖田さんが構える。それもそのはず、この部屋の入り口の向こうには大きな魔力を感じるからだ。沖田さんと同じぐらいか・・・それ以上の強大な魔力を感じる。
扉に手をかける。不思議と開ける手は重たい。
「・・・いない?」
が、扉をゆっくり開ける。しかし、開けた先には誰もいなかった。外へ出て改めて周りを確認する。しかしこれといった人は見当たらず、部屋へ戻ろうとしたその時、俺の身体は沖田さんに引っ張られる。
壁に思いっきり叩きつけられ、一瞬意識が落ちかけるが、目を開けた次の瞬間、俺の視界に入ったのは刀を振るう沖田さんの姿、相手はこの前の黒衣の槍使いだった。

「沖田っ！」
「マスターはそのまま隠れててください！ここは私が！」
沖田が部屋の前のロケーションで槍と打ち合う。しかし、リーチは槍の方が長く、沖田がじりじりと後退させられる。飛んでくるような槍捌きが沖田を襲う。紅い槍は確実に彼女を捉えていた。
身体の位置と刀を駆使してなんとか耐える。しかし、このままではいつか押されてしまう。
沖田は槍の先を地面に叩きつけると刀を滑らせ目の前の女性――――ランサーに向けて切りかかるが、ランサーは姿勢を落とすとスレスレで回避、そのまま脚で沖田の身体を捉え、蹴り飛ばす。強めの蹴りが当たり、沖田の身体はさらに後退させられる。
「ふふふ・・・逃げ切れるか」
「くっ！場所を変えなければ！」
沖田は手すりを超え、下に降りる。幸いここは二階。着地の衝撃、硬直なく動ける。ランサーもそれを見て追撃してくるように降りてくる。
しかし、この戦場・・・時に広い場所では、沖田の力が真に発揮される。
瞬間、沖田の姿が消える。彼女が居た位置には多少の砂埃があるだけで、彼女の姿はランサーの視界には映っていなかった。そして次の瞬間、ランサーは槍を横一閃に振る

う、その槍の先に何かが当たった完食がする。
槍を振るったランサーの後ろ、そこには刀を振り終えた沖田がいた。彼女もランサーと同様に横一閃に振るったようだ。
彼女の能力、縮地法だ。膝の力を抜き、前に身体が倒れる力を利用した、所謂「滑り足」だ。大きな筋肉運動がなく、動き出しが分からない上に、気を抜けば「一瞬」で距離を縮める技である。
一歩で距離を縮めるのは「二歩一撃」だ。これだけは間違えては行けない。
「・・・消えたか。厄介な」
「ランサー。あなたでもこの速度は追えないでしょう」
黒衣の槍使いと沖田さんの戦いは凄かった。だが・・・それ以上に俺の心に残ったのはそれだけじゃない。
「久しぶりだな。慧」
「!?」
声のする方向。そこには俺の親友・・・天月　御門が見たことの無い服に身を包んで立っていた。

6話

下で沖田総司が他の英霊（サーヴァント）と戦闘をしている時、俺は部屋の前で久しぶりの親友、天月御門と遭遇していたが。御門の様子はおかしく、その目は俺を敵対視するものだった。

「御門・・・なのか」

「そうだ。久しぶりだな慧」

彼の手はポケットに入っているものの、彼から感じるモノは何か違う。殺意・・・とでも言うべきか。

ともかく目の前の親友は俺の知っている親友から遥かに変わっていた。まるで欲望の塊・・・そんな感じの人間になっていた。

御門が近寄ってくる。俺は恐れを抱き、少しずつ少しずつ、身体を後退させていく。が、御門はその近づく歩みを止めない。

「・・・御門」

「慧。話があるんだ」

ゆっくりと、それでも懐かしさを感じる声。しかし、その声すら俺には不信感の塊で

しかない。あの日、学園で出会ったコイツの目は壊れていた。人のものでは無い。まるで欲望に囚われていた人間の目だ。
「なんだよ」
「俺と手を組まないか?」
　コイツは何を言っているんだ?俺には御門の言っていることが理解できなかった。
「何を言ってる」
「そのままの意味だよ。俺とお前は魔術師(マスター)なんだから。手を組んだっていいだろ」
「正気なのか」
「正気じゃ無ければこんなこと言わねぇよ」
　目の前にいるのは御門。しかし、あまりの変わりよう、そして言葉の冷たさに俺は唖然、そして悲しみを覚えていた。俺の心は壊れそうだったが、目の前の親友を信じて辛うじて保っている。
「・・・そう考えるな。お前の英霊(サーヴァント)だけでは勝てないから忠告に来てやっただけだ」
「何・・・」
「沖田総司の事を知ってるか?」
　知ってるさ。幕末の天才剣士、新撰組の一番隊隊長、剣豪に数えられる程の人物だ。それがどうかしたのか。

しかし、ここでふと風が変わる。そう言えば先程から聞こえていたはずの金属音が聞こえない。武器と武器とがぶつかる金属音・・・それが全く聞こえないのだ。

さらには御門の言った「忠告」の言葉。もしかしたらと思ってしまうが、考えは現実になる。

沖田総司は天才だ。しかし、それ故に彼女の弱いところがある。それは彼女が「病弱」という点だ。

「沖田さん！」

「もう遅い」

急いで沖田さんが居たであろう方に視線を向ける。しかし、そこには血を吐き、服に赤の血が流れる沖田総司と朱の槍をその首に押し立てた黒衣の狩人が立っていた。

やはり俺の予想は当たっていた。英霊（サーヴァント）はその英雄の能力を余すことなく反映している。それは反面（バッドステータス）だろうが関係なく、だ。

「しまった！」

「さぁ、選べ慧」

「・・・嫌だと言えば？」

「ここで魔術師（マスター）の権限を消滅させる。殺してでもな」

要するに殺すって事じゃないか。遠回しとはいえ、面と向かって言われるのはなんか

嫌だな。

しかし、心の中で悪態を着いたところで状況は変わらない。黒衣の槍使いの槍は沖田さんの首元にあるし、俺が戦ったところで御門を出し抜く程の力がある訳では無い。それに出し抜いたところで先程の速度・・・黒衣の槍使いの速度を見たあとでは逃げれる気がしない。

だが、御門が言うからにはどうやらマスターは英霊（サーヴァント）を失っただけでは魔術師（マスター）としての権利は失うことは無いらしい。つまり、令呪を使い切るか、死ななければ魔術師（マスター）としての権限は失わないみたいだ。

・・・ゆっくり、力強く唇を噛む。この状況を打破する方法がない。最悪令呪を使い、沖田さんを置き去りにすれば俺は生き残るだろうがその場合彼女は助からない。そして時間も経たず、英霊（サーヴァント）を所有していない俺は抹殺されるだろう。だが、ここで切らなければ俺も死んでしまうかもしれない。

死を分かつ決断が目の前に迫る。俺の思考は止まりかけている。どうする・・・どうする。としか考えなくなってきている。最早最善策などないと分かっていてもだ。

その時、目の前を閃光が裂く、誰だ。とは考えなく、ただ閃光が放たれた方を見る。そこには俺の見知った、懐かしい人が立っていた。

赤いコートに身を通し、スカートを風になびかせるその姿・・・間違いない。あの人

は・・・。
「久しぶりね。慧」
「凛・・・姉・・・さん?」
俺の義姉、遠坂凛がその手に宝石を持ちながら見たことも無い笑顔で俺たちを見下ろしていた。
しかし、凛姉さんが乗っているのは屋根とか、そういうものでは無い。魔術・・・によって召喚した鳥のような生物に乗っていた。
「なんだ・・・慧の知り合いか」
「あら、ランサーのマスター。悪いけどその可愛い～弟に手を出さないでもらえるかしら」
「一般人が何を。目障りだ」
御門が腕を振り下ろそうとするが、その手は何かに弾かれたように後ろへ飛ばされる。姉さんの手には宝石の跡があった。子供の時に何度か見た「宝石魔術」だ。それも御門の倍速い速度で放たれる。
その後、呆気に取られている御門だったが、次の瞬間、姉さんが御門の前に現れる。早すぎて見えない・・・恐らく「瞬間強化」の類いだが、早くて見えなかった。
その後、御門の身体が押し返される。気がつけば凛姉さんが昇竜拳なるものを御門の

腹に当てていた。スカサハは「やれやれ」と言わんばかりに槍による拘束を解く。
「・・・ぐっ・・・」
「話は終わりかしら。なら・・・」
「まぁ待て、マスターは話があってきたのだ。そこの小僧にな」
スカサハが介抱するように御門の前に立つ、御門は腹を抑えながらフラフラと立つ、どうやら痛かった上に魔力が乗った打撃らしく、予想より御門の顔が引きつっている。
「話とは何かしら。弟をいじめるなら・・・分かるわよね」
「安心しろよ。別に取って食う訳じゃねえ」
ともかくここら辺から身を引こう、その提案に俺は頷くことしか出来なかった。

「・・・同盟を持ち込みたい？」
御門から持ち込まれた話は以下の内容だった。
まずは俺たちでタッグを組むこと、利点は二つ、一つ目は沖田総司の体質である「病弱」をカバーできること。戦闘中に魔力による補給を行うことで、体質によるデメリットをカバーできる。二つ目は戦闘が楽になること、「神殺し」の英霊（サーヴァント）・・スカサハ、「剣

聖」の沖田総司。この二人がいれば多少の英霊（サーヴァント）には負けないとの事だった。
　もう一つの利点はお互いの生活カバーの事だ。いがみ合っていればお互いの生活に支障が出る。特に俺と御門は家を知っている。もし敵に遭遇してそんなことを言いふらされては困るからだ。それに、友人の俺たちしか同盟は組めないだろうからな。これも見越してなのだろう。
　最後の決め手になったのは・・・俺が人を殺せないことだろう。
「・・・言い分は分かったわ。それで？タダでって訳じゃないでしょ？」
「あぁ、お互いの監視だ、どうせあんたが来たのもそのためだろう？魔術協会からのお達しでな」
「そうなのか姉さん」
「・・・そうよ。言いたくもないけど、言峰って奴にに頼まれたのよ」
　その後、姉さんから協会側の話を聞く、協会の管理者、コトミネ　シロウはどうやらこの聖杯戦争の監視者として姉さんを使うことを決めたみたいだ。ある条件を残して。
「・・・その条件は言えない？」
「ごめんね慧。これは私たちの問題なのよ」
　姉さんが初めて怒った感じで返してくる。姉さんたちの問題か・・・俺が迷惑を掛けたなら今すぐにでも謝りたいが、それも出来ない。

しばらくの沈黙、打ち破ったのは意外にもスカサハだった。
「もう良いだろう？ならこのお馬鹿（マスター）の監視は私がしよう」
「信じていいの？」
「私は仮にも一国・・・その女王だ。それに、弟子はじゃじゃ馬だしな、調教するのは得意だ」
「クー・フーリンね。なら大丈夫だわ」

姉さんの口からその名が出たのに俺は驚愕した。本来なら普通の人は知るはずのない言葉・・・だが、俺の疑問は晴れることなく話し合いは終わった。

「もしもし？今着いたわよ」
慧の部屋の前、壁にもたれながら凛は電話を耳にかけていた。部屋の中では慧が頭を抱えて魔導書をじっくり読んでいるのが見える。
「分かってるわよ・・・しばらくここに居るわ。慧がまさかアレを持ち出すなんて考えてなかったもの」

『・・・姉さん』
「襲いやしないわよ。こんな子供に・・・『あったりまえでしょ！』・・・冗談が通じない子ね」
　いきなりの怒号に少し下がってしまうがこれが彼女たち姉妹の在り方、あるべき戦いを終え、勝ち取った平和なのだ。しかし、その平和は今、再び崩れていた、あるべき戦いによって・・・。
『先輩はどこか言っちゃうし・・・はぁ』
「まぁまぁ。定期的に慧からも電話かけさせるから、貴女は慧が帰る場所を守ってて」
『うん。姉さん』
「それじゃあね。桜」

「姉さんはここに残るの？」
「そーよ。しばらくこっちに残るわ。向こうに戻ってもあんまりやることないしね」
「ふーん」
　姉さんがソファで寝転んでるのを見てご飯の支度を進める。沖田さんは現在俺の部

屋で寝ている。病弱の異常持ちは隠していたらしく。初めて召喚した時も恐らく魔力でカバーしていたのだろう。それも今限界がきている。

急いで来た姉さんは沖田さんの顔を見てびっくりしていたがなんだろう。先程の戦いといい、姉さんは妙に手馴れている。

「・・・姉さん」

「何かしら」

・・・今聞かなければ、今後聞く機会は無いかもしれない。後悔する心を抑え、恐怖に負けず、俺は姉さんに掛けたい言葉をかけようとするが、それは声にはならなかった。

聞いたら怒られるかもしれない。聞いたら姉さん達に嫌われるかもしれない。だけど・・・聞かないと・・・。

「大丈夫よ慧。誰もアンタのことなんか嫌いにならないわよ」

「え・・・」

「恐らくあの子を呼んだのも偶然でしょ？そのくらい手馴れていないのを見ればわかるわ」

「じゃあ・・・」

「そうよ、私、遠坂凛は聖杯戦争の経験者よ」

・・・やはりそうだったか。妙に手馴れていると思ったらそう言う事だったのか。

姉さんの日記のある程度は見たが、それは俺が恐らく引き取られた後の話だけ、その前の話が書いてある日記は姉さんの部屋からは見つからなかった。桜姉さんの分も探したがそれもなかった。隠したい事があるとは思っていたが・・・。

「・・・聞かせてくれ姉さん。その戦いで何があったのか」

「いいの？長くなるわよ」

「・・・構わない。そのためにこの話をしてるんだから」

姉さんの話は明日の朝まで続いた。悲しい話を、姉さん達が知る戦争の最後を・・・。